

のでいつか主人に逢ったとき、私と子供三人が北海道に行ったことを伝えてくれるよう頼みました。船に乗ってから出航するまでの時間がたった一日の出来事なのにもすごい長い時間感じました。この日、見ず知らずのやさしい人々にささえられて、これから先北海道へ渡ってからの生活のこと、子供のこと、主人と父のこと、不安な気持ちがうすらいでいくのを感じずにはいられませんでした。船は夜になってから出航しました。次の日の昼稚内に到着し、義姉のいる砂川へと向いました。其の後主人と義父は昭和二十二年春引揚げて来ました。やっと一家がそろいました。最後に戦争は二度と起こさないで下さい。

私の引揚体験記

北海道 齊 当 瑞 穂

私は昭和十一年、希望を胸にいただき樺太の地に夢を託した両親とともに、我々家族七人が渡樺致しました。(当

時私は七歳)でした。

落ち着いた先は北緯五十度線に程誓い西海岸の恵須取町という所へ入植、そこは大変、種々の面で、環境もよく戦時中とはいえわりと平穩の日が続きました。

それから後、二十年八月九日と記憶しておりますが、突如としてソ連が参戦私共の街にも進駐、空と海の両面から空襲或は艦砲射撃と忽ちにして、戦争に巻き込まれてしまいました。街も見える見るうちに焼け崩れ戦争の怖ろしさをそのとき身をもって味わったわけです。折りかえし折りかえし飛来する空襲爆撃には身もすくみ近くの麦畑へ逃げかくれるのがやっとでした。そして数日後の八月十五日、忘れもしない空は抜けるように晴れ渡った暑い日でした。日本は無条件降伏により終戦を迎えたときは、私は十七歳になっておりました。

それからが大変でした。どうしたら良いのか頭は混乱家財其の他の物についても愛着こそあれ、すべてに見切りをつけとにかくここから逃れる以外すべなしと、家族一同裸一かんで、我が家を後にしたのです。

出来得れば一日も早く皆の待つ集結場所までと、およ

そ百キロにも及ぶ険しい山道を選び必死で南下を始めたのです。八月の末とはいえ夜ともなると何か肌寒い夜道を黙々と三日三晩恵須取から内路まで地図では近いが歩いて見ると大変なもので、中央山脈が横断している国道だけに原生林にはクマの出没するか所も何か所を何とか過ぎ日中は空襲や敵襲を避けながら漸くにして内路の一般邦人の帰国を待つところへ着くことが出来たが、思えば疲労と恐怖の必死の逃避行でした。

しかしそれから（内路）今度は鉄道利用で、真岡まで汽車で移動することになり数日待たされ、漸く炭車に乗ることが出来、やっと一息つくと同時に命だけは助かったんだなと思いなから真岡の収容所に到着き、それから間もなくソ連の進駐統治下におかれ多少秩序も安定して各々元の職場へ戻るよう命令的に勧められました。まだまだ精神的にも不安もあり本国へ帰り度い一心で残ることはやめたのです。

それから三年あまりの二十三年十月漸く待ちに待った引揚船到着「興安丸」に乗船でき函館の港に上陸、これからのことなど暫くわすれ十数年故郷を離れていただけ

に、ただ懐かしく子供の頃を思い浮かべただただ感激ひとしおでした。

戦後四十五年にもなる今、渡樺以来十年あまり、手に汗しながら家族一同一丸となり開拓した農地での収穫、苦しくもありまた楽しかった。それも今となってはすべてが水泡に帰し戦争の惨めさ悲しさを身をもって味わった。我々家族、特にすべてを失い子供達を案じながら他界した両親が、さぞかし無念のことと思う。

苦闘実らせた引揚者群像

北海道 新田 平治

四十五年前のあの無残な夏のように、ことしも炎暑が北海道を焼いた。平和だった樺太の生活を一瞬に破ったソ連軍の侵攻、四十万人の同胞は、ふるさとを追われ、樺太経営凡そ半世紀の財産を捨てて裸一貫で本土に帰りついた。

混乱のうち命を失ったものも少なくない。引揚者の多